

大学名

筑波大学(芸術系)

第55号テーマ
「大学と文化・芸術」

表題

2020オリンピック・パラリンピック東京大会の文化プログラムに参加！
スポーツとアートの融合による「リボーン・アートボール・プロジェクト」の実施

取材対応者



芸術系
太田圭教授
(日本画制作が専門)



大学院博士前期課程
芸術専攻 日本画領域
1年 富田 楓さん

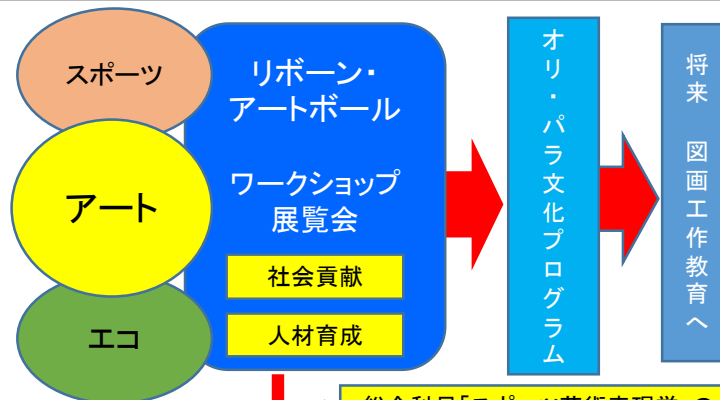
【特色ある取組】 かつてオリンピックにスポーツをテーマとした作品による「**芸術競技**」があり、1936年ベルリン大会では**画家の銅メダリストが2人いた**ことを知る人は少ない。この史実を授業を通して周知させると同時に、現代における「**スポーツと芸術の関わり**」を身近に感じてもらうために思いついたのが、捨てられるまで使われたボールに絵を描いてアート作品として**リボーン(再生)**させることであった。その背景には国立の総合大学である筑波大学では芸術と体育の2領域が隣接し、芸術系と体育系が研究面で連携できる環境がある。この**アートとスポーツを融合させた取組**は、本学の研究・教育環境を「強み」として活用した、横断的かつ融合的な社会貢献である。それはまたアーティストとアスリートの間で交わされる「**リスペクトのパス交換**」であり、廃棄ボールのリサイクルによる**エコ**も含まれている。クーベルタンの理念、すなわち精神の表現である芸術と身体表現であるスポーツで成り立つ近代オリンピックも象徴する。なお本取組は**2020オリンピック・パラリンピック東京大会の文化プログラム**に参加している。

平面作品と異なり様々な角度から見られる球体の作品は見る人や構図によって大きく変化していくことが魅力の一つです。作品をみると、こんな気持ちで描いているのだらうと伝わって楽しませてくれます。



芸術専門学群
洋画コース2年
遠田悠斗君

アートボールに夢中になって絵を描く子供たちを見て、自分の子供の頃を思い出しました。学校の授業と違い、自由に描きたいものを描くという経験を通して、多くの子供たちに絵を描くことを好きになってくれたら嬉しいです。



総合科目「スポーツ芸術表現学」の開設(2017年～)



↑ワークショップの様子
(つくばカピオ)



↑展示風景(文部科学省情報ひろば)



↑リボーン・ボール作品(サッカーボール、バレーボール、バスケットボールを使用)



↑バドミントンのシャトルコックを使用

【上記取組による成果・評価など】 2017年に筑波大学教育戦略プログラムに採択され開始したこの取組は授業科目「**スポーツ芸術表現学**」の開設につながった。2018年度茨城県文化プログラム推進事業に採択され、**本学と茨城県が連携**し県内各地で**ワークショップ**(県内15回)、**作品展示**(2ヶ所)を実施してきた。この活動実績が評価され、2019年度も茨城県文化プログラム推進事業として継続中である。《作品展示》では、文部科学省情報ひろば(5～8月)をはじめ、民間施設(5～7月)、茨城県つくば美術館(10月)、いきいき茨城ゆめ国体・いきいき茨城ゆめ大会の文化プログラム(10月)、筑波大学東京キャンパス(2020年2～3月)での開催が予定されている。《ワークショップ》では、小学生を中心に、保育園児、特別支援学校の児童生徒、デイケアに通う高齢者、プロのアーティストなどの多様な方々が参加しており、**参加者の累計は約1300名**を数える。**マスメディアの注目度**も高く、常陽資料館(水戸市)での展示は、新聞6紙に記事が掲載され、NHKテレビでの放映もあった。現在も県内市町村の教育委員会や県外美術館からの展示依頼があるなど、**本学および茨城県発のスポーツとアートを結びつけた取組**として拡大中である。制作用の廃棄ボールは、大学や中学校の運動部のほか、サッカーリーグの鹿島アントラーズ、水戸ホーリーホックをはじめバスケットボール、バレーボール、プロ野球などのプロクラブや球団、選手個人からの提供もあり、本取組への理解と協力が増加傾向にある。また小中学校の図画工作・美術の持続可能な教材にも適すると考えている。

【参考 URL など】

茨城県環境生活文化課
いばらき国体

その他「リボーン・アートボール」でネット検索をするとこれまでの活動を見ることが可能です。